

## 韓国現代絵本の誕生

『ペクトゥサンイヤギ』の考察を通して

尹惠貞

### 1 はじめに

絵本とは絵と言葉がある本のことである。しかし、絵と言葉があれば全て絵本となるものではない。この点、藤本(2007: 21)は「絵本では、「絵」と「文章」の両者が互いに補い合い、互いに助け合って情報を伝達する(語る)のです。そこでは、いわば文章では語れないものを絵が示し、絵で示せないものを文章が語るのです。」(傍点原著者)この互いに補い合い、互いに助け合って情報を伝えて初めて「絵本」となるのであって、この機能がなければ「絵本」と呼ぶことはできない。この機能こそが現代絵本とそれ以前の絵本を分かち分岐点であると考えられる。イギリスのランドルフ・コールデコット<sup>①</sup>がこの機能を初めて用いて絵本を作り、現代絵本の源流を作った。

この「互いに補い合い、互いに助け合って」という内容は分かりにくく、換言するとどうなるのだろうか。ニコラエヴァ&スコット(2011: 12)はこの点をより詳細に述べ以下のように区別している。(1)対称的な絵本として、「言葉」と「絵」とが、同じ物語をそれぞれに語る。(2)補完的な絵本として、「言葉」と「絵」とが、お互いの空白部分を埋めあう。(3)「敷衍する」「増強する」絵本として、「絵による物語」が、「言葉による物語」を強調したり詳しく述べたりして支える。(4)対立的な絵本として、「言葉による物語」と「絵による物語」が異なっていたり矛盾していたりする。(1)から(4)が、一冊の絵本に全て出現しなければならぬという訳ではないが、現代絵本はある読者がタイトルを読みあげ絵本の世界に入り、絵本が閉じられるまでの間に展開される絵本のイメージ世界とも言うべき内的

要因(筆者が本稿でそう呼ぶ)を指すものであって、これら4つの機能が多かれ少なかれ存在するものを現代絵本と呼ぶのだろう。現代絵本以前の絵本は内的要因に対しての外的要因である出版・読者・書店さえも整っていなかった。だからと言って現代絵本がこれらを度外視しているわけではない。ここまで述べても「互いに補い合い、互いに助け合って」の漠然さはまだ完全にぬぐい切れてない。この曖昧さを『ペクトッサンイヤギ』(以下、『イヤギ』とする)の内容を分析・考察しながら、韓国の現代絵本誕生について明らかにすることが本稿の狙いである。

現代絵本になる前も絵がある本は存在していた。この点については先行研究でまとめる。2でより詳細に記述するが、先行研究の態度は主に外的要因によって韓国絵本の歴史区分を検討することに概ねその力を注いでいる。しかし筆者は、韓国現代絵本は『イヤギ』をその始点であると考えている。何故なら上記の「互いに補い合い、互いに助け合って」という機能が『イヤギ』にはあるからである。どのようなところがそういう機能かを4で検討するとして、まずは先行研究から順を追って韓国絵本の歴史区分を整理する。

## 2 先行研究

韓国絵本の歴史区分に関する先行研究として、ヒョン・ウンジャ、キム・セヒ(현은자, 김세희 2005)は、①1980年以前までの、「前」絵本期、②1980年代から1990年代初期までの、絵本に対する認識期、③1990年代半ばから現在に至るまでの、本格絵本の出版と翻訳絵本の整理期の三つに分けている。当該先行研究は韓国絵本の歴史がいつ始まったのかまだ整理されていないこと、及び韓国の最初の絵本が何なのかに対する議論の結果もはっきりしてないと述べている。1980年から1990年初期までの絵本に対する認識期において、絵本とは何なのかという概念がやっと形成された時期であるとしつつ、その当時は絵本の絵をまだ挿絵と呼ぶ人が一般読者のみならず、専門家と呼ぶべき編集者・絵本作家の中にも存在していたことも指摘している。

次に、チョ・ウンスク(조은숙 2006)は、今まで韓国の絵本の歴史は一貫して時代を分けながら整理されてない状態であり、また近代絵本が独自のメディアとして認知されるためには学校教育制度に従った識字率の向上と、複製可能な印刷技術、特にカラー印刷及び読者の誕生と独立な個体としての子どもの認識が必要であるとしている。このことから、植民期には既に識字率が向上し、印刷技術も発達しつつあり、何よりも独立した個体とし

ての子どもの認識が芽生えた、として韓国絵本の歴史の出発点を開化期以降と見ている。このことに併せ、絵本とは絵本を取り巻く政治・教育・立法・印刷技術・芸術思潮・社会的言説などから生まれる総体的な産物である。したがって、以下のように五つの時期に歴史区分をする。①近代以前韓国絵本期、②開化期から1960年以前：絵本の萌芽期、③1960年から1978年：絵本の導入期、④1979年から1980年代末：絵本の形成期、⑤1990年代から現在：創作絵本定着期である。

ジョン・ジンホン、パク・ヘスク(정진헌, 박혜숙 2013)は、開化期以降から解放以前までの絵本に対する研究が存在しないことを理由に、当時発行された雑誌・新聞などを土台に絵本に対する認識と発達過程を論じ、これを基礎に現代の絵本と比較分析した。印刷技術の発達に伴い、1910年代初め出版市場に大きな変化をもたらしたと、読者層の大衆化だけではなく、子ども読者層が形成され児童文芸に多様な視覚的な要素が導入される契機となったこと、また1930年代は「絵本」という用語が初めて使われ、実際に絵本が出版されるまでに至ったと言及している。このような新聞・雑誌における視覚的な要素が含まれているものが、現代絵本のひとつのジャンルを確立する動機になったと述べている。

以上の先行研究は、歴史区分をいずれも「前」絵本期から出発させ、本稿でいうところの絵と言葉の相互関係がない挿絵的な時代であっても絵本という歴史区分に含ませる傾向にある。たしかに、現代絵本のジャンルを確立する上では欠かせない動機となっていることは否定できない。しかし以下に示す理由により、単行本<sup>(2)</sup>絵本が誕生した1988年を韓国の現代絵本の始まりとすることは、やはり適切であると考えられる。すなわち、1988年までに韓国で創作された絵本は現代絵本の重要な概念である表紙や余白がカットされ、絵が途中で切れていたり、余白がなくなっていたり、つまりは絵と言葉の相互作用の重要ポイントである絵や余白が印刷コストの削減(ヒョン・キム 2005: 185,189)のために平気で崩されていた。しかし、『イヤギ』は56頁と長編であるし、次章以下で検討するような絵と言葉の相互作用がはっきりと表れているのである。

韓国の現代絵本の歴史区分を1988年から1999年の草創期と、2000年以降から現在に至るまでの繁栄期という二つの区分に定める。なお、大竹(2016: 134-135)は、韓国の創作絵本が確立された90年代から2000年代前半を韓国絵本の創成期とし、90年代後半からの文化的急成長の成果が2000年代前半に世に出され、韓国絵本は隆盛期を迎えたとしている。本稿は大竹の時代区分に近似しているも、繰り返しになるが『イヤギ』が出版さ

れた1988年を現代絵本の始まりと考える点で異なる。したがって、『イヤギ』を現代絵本の出発点と見るべき内的要因を以下で分析する。

### 3 『ペクトゥサンイヤギ』の構成

1988年は韓国においてソウルオリンピックが行われた年であると共に、韓国絵本界においても忘れてはならない年となっている。この年に『イヤギ』が初めての「単行本」絵本として世に出され、現代絵本としての地位を不動たるものとした。また、韓国国内の翻訳絵本も実は1988年を境に出版されたと言っても過言ではない。パク・チャンス(박찬순 2018)によると、韓国は1987年世界著作権協約に加入するまで、外国絵本に対しては盗作が頻繁に行われていた。この結果翻訳ものはコストが安く、韓国国内の創作ものは企画・印税など全ての出版過程を新しく考え・作っていかねばならず、反ってコストが高くなったのである。そんな中、韓国のハンリム出版社会長イム・インス(임인수)と日本の福音館書店の当時会長松居直は、著作権法やロイヤリティを念頭に翻訳出版契約を結び、日本の絵本を1988年より韓国国内で出版していった。韓国国内の絵本の出版事情は著作権法や日本絵本の韓国での翻訳出版と深く関わっているという歴史的背景を、この先行研究を通して知ることができる。一方、先行研究のように考えるのであれば、『イヤギ』の創作活動及び出版は、コストのかかる韓国国内の新しい試みであったことが改めて見てとれる。1990年に韓国の絵本としては『山になった巨人 白頭山ものがたり』(以下、『日本語版』とする)が日本で初めて翻訳出版されている。この翻訳出版の影響もあってか、韓国の絵本は徐々に外国で翻訳されるようになった。また、それまで営業不振であった『イヤギ』自体も、『日本語版』を仲介に宣伝効果を上げ、2009年には韓国において出版社を変え、改訂新版(以下、『改訂版』とする)が出版されることになる。『改訂版』は『イヤギ』の改訂新版ではあるが、より『日本語版』の影響をうけており、その点も併せて4以降で詳述し、本章では一先ず『イヤギ』のあらすじと構成について述べたい。

#### 3.1 あらすじ

まだ混沌とした中から天の国のおおとりの、時のお告げにより世が生まれ、朝鮮という国が誕生する神話的な物語である。世が生まれた当初、二つの太陽と二つの月があったことから、昼は暑すぎ夜は寒すぎて人々は安らかでなかった。その時、天を司るハンウル

王が黒龍巨人に太陽と月をどうにかするよう命じるが、失敗に終わってしまう。人々は地を司るタニム王に祈り、白頭巨人が千斤の弓矢で太陽と月を一つずつ海に沈めたが、黒龍巨人は白頭巨人を妬むようになった。ハンウル王は息子のハンウン王子を地に送り、心の清く美しいむすめと結ばせ国を治めさせた。このことで、朝鮮の人々はますます豊かになった。

ある日、黒龍巨人はハンウル王の目を盗み、地にくだっては隣国を喰し朝鮮相手に戦いを起こさせ、朝鮮は荒れ果てることになる。朝鮮の人々が祈ると、白頭巨人が現われ虎に変身し、龍に変身した黒龍巨人と百日戦った。力尽きた黒龍巨人は鷹に変身し逃げようとするが、白頭巨人は鶴に変身しその鋭い嘴で鷹の胸をつき、敗れた黒龍巨人は砂になり、そこは広い砂漠となる。白頭巨人は朝鮮の人々に向かって何か災難や困難がある時は必ず助ける、と言いつつ息絶え、横たわり眠ってしまう。やがて「白頭山」と人々はその山を呼ぶようになった。長い月日が過ぎ、朝鮮に干ばつが起きた。国王はどうすればよいか心を痛めた。そこで人々は「雨乞い」することにし、踊り歌った。稲妻がひかり、雷が轟き、何日も雨が降り続けた。白頭山の頂きに池ができ、そこを「天の池」と呼ぶようになった。

### 3.2 三つの神話の再話

#### ①天地創造神話としての再話

あらずじに「世が生まれた当初二つの太陽と二つの月があったことから、昼は暑すぎ夜は寒すぎて、人々は安らかでなかった。」という内容があるが、これは崔仁鶴の『韓国昔話の研究』(1976: 406)で紹介されている神話的昔話の天地創造物語に当てはまる。

崔では「日一つとって大星、小星を、月一つとって北斗七星、南斗七星をこしらえた」となっており、本絵本の太陽と月一つずつを海に沈めたというところとは異なり、作者により再話されたことが分かる。

#### ②建国神話としての再話

天から桓因(ファンイン)の息子である、桓雄(ファンウン)が地上に降りた。降りる際、群れ 3000 人を連れ太伯山(テバクサン)の頂上である神檀樹(シンダンス)に降り立ち、神市(シンシ)を開いた。風伯(ブンベク)、雨師(ウサ)、雲師(ウンサ)を連れ、穀物・生命・病・刑罰・善悪など人間の三百六十種を超える事柄を司り、この地において人間を支配した。

この時、熊と虎が同じ洞穴に住みながら、人間になりたいと願った。そこで桓雄はヨモギひと束とニンニク 20 個を与えながら、「お前たちがこれを食べ、太陽を 100 日見なければ

ば、やがて人の姿になるであろう」という。熊はそれを守り女の体になったが、虎は守れず、人間の姿に変わることができなかった。熊女(ウンニョ)は結婚する人がいなかったので、いつも神壇樹の下で子どもが欲しいと願った。そこで桓雄が人間になり、熊女と結婚して産んだ子どもが朝鮮の祖である檀君という。

桓雄が降り立った太伯山は白頭山の別名<sup>(3)</sup>(ソ・デソク서대석 1992: 33)でもあり、このことは三国遺事<sup>(4)</sup>に初めて記録されている。また「熊女」と「檀君」の語彙や話は『イヤギ』に出てこないが、ハンウル王は天からハンウン王子を地に降り立たせ、心の清く美しいむすめと結ばせて、朝鮮という国を治めさせたとなっているので、建国神話の桓因が『イヤギ』のハンウル王に当たり、地上に降り立った息子の桓雄がハンウン王子に当たる。心の清く美しいむすめが熊女に該当するのである。以上から、建国神話をモチーフにしていることは確かである。

### ③白頭山伝説の再話

平和な白頭山のふもとの町に、黒龍が現われ火の剣を回し、町はすっかり干からびてしまった。そこで白氏長者が黒龍と対決し、竜宮から姫が現われて將軍水を飲むように勧め、白頭山の頂上を掘って地下水を抜き干ばつを解決した。掘った土が16の峰になり、掘った跡が天の池となる。白氏長者は黒龍を追放し、民を守るために姫とは天の池の中で住むようになる(チェ・レオク재래속: 1992)。

『イヤギ』で朝鮮に干ばつが起きたこと、白頭山に祈りを捧げ大雨の後「天の池」ができたことが語られており、この伝説をモチーフにしていると考えられる。

## 4 絵と言葉の相互作用

本来ならば頁の順を追いながら、全ての絵と言葉の相互作用の異同を『イヤギ』と『日本語版』で比較検討すべきではあるが、本章では特にニコラエヴァ&スコットがいうところの4つの機能に注目しながら述べる。また『改訂版』との比較を通して、『日本語版』が『改訂版』に与えた影響や『改訂版』独自の性質にも言及する。

なお、『イヤギ』の文章をST(Source Text, 起点テキスト)として表わし、その直後に括弧書きで筆者が直訳、その後に『日本語訳』の文章をTT(Target Text, 目標テキスト)として示す。

#### 4.1 『イヤギ』と『日本語版』の比較

pp. 8-9

ST : 하늘에서 내리는 청이슬과 땅 밑에서 솟아나는 흑이슬이 한덩어리가 되어  
온갖 동물과 식물도 생겨나기 시작했습니다. (空から降る青い露と地から湧き上  
る黒い露がかたまり、全ての動物と植物が生まれ始めました : 下線部筆者、以下同)

TT : 天からおりたあおいつゆ、地からわきでたくろいつゆ、ふたつのつゆがかたま  
って、とりやけもの、さかなやむしたちがうまれました。 くさやきも、はえだしまし  
た。



図1 : pp. 8-9

上記STとTTの下線部の訳し方が異なっていることを前提に絵を観察すると、両面見開きの真ん中を境に大きく放物線が描かれている。放物線が左(8頁)へ下がる方は植物のようなものへと繋がり、さらに円を描きながら鳥と思われるものへと繋がっている。反対に放物線が右(9頁)へ上がる方は角を持った麒麟のようなものへと繋がり、さらに円を描きながら魚と思われるものへと繋がっている。色合いは基本暖色系であるが、左頁には青系の色合いも含まれている。

STは絵を一つにまとめて全ての動物と植物と表現している。TTでは鳥やけもの、魚や絵にはない虫も言葉として翻訳し、植物も草や木と詳述している。ST・TTどちらも(2)補完にあたると思われるが、STでは「全ての」という形容詞を用いることで、言葉による包括的な補完が行われたことに対し、TTでは絵を詳細に読み込むことで、個別的な補完が行われたと考えることができる。次の頁をめくると、

ST : 세월이 흐르면서 사람들도 차츰 많아지고 땅위에 여기저기서 마을을 이루며 살게 되었습니다. 조선이라고 부르는 끝없이 넓은 들에도 여러 마을이 모여 나라를 이루며 살았습니다. 지금의 만주별관도 그때는 다 조선땅이었지요.

그들은 착하고 씩씩했지요. (月日が経つにつれて、人々もどんどん増えていき、色んなところに町を作り暮らし始めました。朝鮮と呼ばれる終わりのない広い平野には色んな町が集まり、国を作り住んでいました。今の満州平野もその時はすべて朝鮮の土地でした。彼らは優しく、凛々しかったです)

TT : ひともしも、うまれました。(波線筆者、以下同)

ながいときがたち、ひとのかずもふえて、あちこちに、むらをつくって、すむようになりました。

朝鮮とよばれるひろいひろい大地にも、たくさんむらができ、

やがて、おおきな国をつくりました、

ひとびとは、みなやさしく、しんせつで、なかよく、いきいきと、くらしていました。

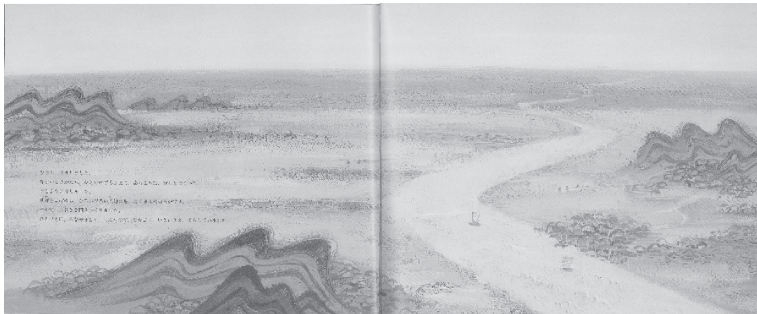


図 2 : pp. 10-11

上記STとTTを比較すると、波線ひともしも、うまれましたという言葉はSTにはなく、TTのみに出現している。また「今の満州平野もその時はすべて朝鮮の土地でした」はSTのみにある言葉であり、TTでは削除されている。理由としては、絵を見れば平野が続いていることは分かるし、『イヤギ』では満州平野であることが歴史的に重要な意味<sup>5)</sup>を持つ(ヨ・ホギョ여호규 2017)が、『日本語版』では歴史的・政治的意味を避けるために削除されたのであろう。

さらにSTの最後を見ると「彼らは優しく、凛々しかったです」を、TTはより詳細に



「みなやさしく、しんせつで、なかよく、いきいきと、くらしていました。」と翻訳している。なお、絵には平野や大きな川・町を見ることはできるが、人の様子は見ることはできず、言葉のみから描写されている。

この両面見開きのSTとTTも(2)の補完に当たると見ることができよう。ここから数頁を捲り、

pp. 16-17

ST：言葉なし。

TT：白頭巨人は、千斤のおもきのおおゆみに、千斤のやをつがえて、太陽ひとつと月ひとつを、たちまち、うみに、いおとしてしまいました。これをして、黒龍巨人は、白頭巨人をたいへんねたみました。



図3：pp. 16-17

STはこの両面見開きにおいて、言葉がないのでじっくり絵を読者に見せる狙いがあったように思う。なお、TTに書かれている言葉をSTでは前の頁(pp. 14-15)で既に紹介している。TTではあえて頁を分けることで、STにない(1)対称的機能を生じさせようという意図があったのだろう。またTTで下線を引いた部分は、STでは後の頁(pp. 18-19)に書かれる言葉となっており、TTではこの頁に移動させているのである。ねたみという気持ちは絵では描けず、言葉で絵を補う最たる例として挙げることができる。

この両面見開きのSTは言葉のない、つまり前の頁に言葉を置くことで絵による物語が言葉による物語を強調している「敷衍・増強」と言える。TTでは敷衍・増強という機能はなくなり、「対称」と「補完」的機能が生じることになった。ここから数頁を捲り、

pp. 32-33(絵省略)

ST: 흑룡거인이 죽자 조선의 사람들은 용기를 얻고 적군을 단숨에 물리쳤습니다.

(黒龍巨人が死ぬと、朝鮮の人々は勇気を得て敵軍を一気に倒しました)

TT: 黒龍巨人がほろびると、朝鮮のひとつとは、ゆうきをふるいおこし、てきを、いっきにおいはらいました。

この両面見開きのSTとTTは特に言葉の付加や削除はなく、ほぼ同じように訳出されている。ST・TTどちらも言葉と絵が同じものを語る対称に当たる。この両面見開きは、高句麗壁画に近似している。この壁画(ジョン・ホテ전호태 2011: 40)<sup>(6)</sup>は現在吉林省集安県にある舞踊塚狩獵図であり、『イヤギ』の作者であるリュ・チェスウ本人も『イヤギ』はこの壁画をモチーフにしたシンフォニー<sup>(7)</sup>であると例えている。次の頁を捲ると、

pp. 34-35(絵省略)

ST: 사람들은 기뻐서 환성을 올렸습니다. “백두장군 만세!” “백두장군 만세!”

길고 긴 싸움에서 기운이 빠진 백두거인은 조선의 사람들에게 말했습니다. “나는 영원히 너희 곁에서 지킬 것이다. 언젠가 다시 재앙이 올때 나는 다시 깨어날 것이다.”(人々は喜んで歓声を上げました。「白頭將軍万歳! 白頭將軍万歳!」長い闘いで力尽きた白頭巨人は朝鮮の人々に言いました。「私は永遠にあなたたちのそばを守ろう。いつかまた災厄が来るときまた目覚めるだろう」)

TT: 「白頭巨人 만세! 白頭巨人 만세!」

ひとつとは、よろこんでさげびました。

ながいながいたたかいつかれきった白頭巨人は、しずかにいいました。

「わたしは、あなたたちとともにいて、いつまでも、あなたたちをまもろう。

いつか、この朝鮮に、わざわざいぐるときがあれば、わたしは、ふたたび

おきあがって、かならず、あなたたちをすくうだろう」

STとTTを比較すると、白頭將軍を白頭巨人と訳出している。『日本語版』では將軍と訳出すると、戦国時代の將軍を連想させる可能性があるので今までの部分に合わせて

巨人と訳出されたと思われる。また万歳はバンザイと訳出することも可能であったが、韓国語の音である「マンセ」と訳出し、それに「ばんざい」であると註を付けている。TTにおいては「マンセ」という脚注が補完的役割を果たしていると思われる。数頁さを捲ると、

pp. 38-39(絵省略)

ST： 세월이 흐르면서 백두거인은 거대한 산으로 변해갔습니다. 사람들은 이 산을 백두산이라고 불렀습니다. 이 산을 중심으로 나라는 사방으로 넓어지고 세력은 날로 커졌습니다. 그리고 조선에는 이런 백두산 노래가 전해 내려오고 있었습니다.

“나는 일어나리라. 그대가 북을 치고 노래하면 그때 우리는 조선의 먼동을 다시 보리라. 나는 깨어나리라. 그대가 억눌려 신음하면 그때 우리는 조선의 먼동을 다시 보리라.”(月日が過ぎ白頭巨人は巨大な山に変わっていきました。人々もこの山を白頭山と呼ぶようになりました。この山を中心に国は四方に広くなり、勢力も日に日に強くなりました。そして、朝鮮にはこのような白頭山の歌が伝わってきました。私は立ち上がる。あなたが太鼓を叩き歌えば、我々は朝鮮の夜明けを再び見るであろう。私は目覚める。あなたが虐げられ呻けば、我々は朝鮮の夜明けを再び見るであろう。)

TT：ながいとしつきがたち、白頭巨人は、いつか、おおきな山になっていました。ひとびとは、この山を白頭山とよびました。そして、この山をまんなかに、朝鮮の国は、しほうにひろがり、としとともに、いきおいがよくなっていったのです。やがて、朝鮮のひとびとのあいだで、白頭山のうたが、うたいつたえられるようになってきました。

あなたたちが しいたげられ うめくとき

わたしは めざめる

そのとき ふたたび みるだろう

朝鮮のよあけを

あなたたちが たいこをたたき うたうとき

わたしは たちあがる

そのとき とともに うたおう

## 朝鮮のよあけを

ST と TT を比較すると、白頭山の歌が伝わったとしながら歌の順序が逆になり、より縮小されていることが一目で分かる。なお図4で紹介するが、雨乞いの踊りの場面で太鼓を叩くので、TT ではこれからの話の流れを見込んで、歌の訳を ST 通りの順序ではなく、逆に翻訳したのだろう。このことは絵本の絵と言葉の相互作用のみならず、ページターナー<sup>(6)</sup>からくる相互作用で説明が可能である。雨乞いの頁へと捲ると、

pp. 42-43

ST：言葉なし。

TT：たいこをたたき、うたをうたい、のどのかわきも、はらのへったのも、つかれもわすれて、あまごいのおどりを、おどりました。くるひもくるひも……。



図4：pp. 42-43

この両面見開きは、『イヤギ』において二つ目の言葉なしの頁であり、雨乞いの祈り(踊り)の絵を丁寧に読者に見せるものとなっている。なお、TT に書かれている言葉を ST では前の頁(pp. 40-41)で紹介済みである。この両面見開きの ST は言葉のない、つまり前の頁に言葉を置くことで絵による物語が言葉による物語を強調している「敷衍・増強」と言える。TT では「敷衍・増強」という機能はなくなり、対称的機能がより強調されることになった。

また、この「祈雨祭(기우제)」を捧げるために歌い踊る場面の人々の顔は韓国の「タル(탈：仮面)」に似ており、踊りは「タルチュム(탈춤：仮面踊り)」に近似している。タルは朝鮮語で人がかかる疫病や人に起こる災難を表わす言葉でもあり、それらを追い出す意

味合いを込めて仮面や仮面踊りは作られたのである。このようなタルは、はじめ主に信仰的な側面のみを有していたのが、信仰的な側面は減退し今では芸術的な側面のみが残ることとなった。

なお『イヤギ』に描かれている雨乞いの場面は、信仰的な側面が大きく、見開き左に虎の舞を見ることができるが、従来山川には龍がおり、龍が静まりかえっていると雨が降らず干ばつになると言われ、龍を覚醒させるためには虎の頭を山川に沈めること「沈虎頭(침두)」が行われていたという記録(イ・ウクイウ 2000: 171-181)がある。それが象徴的に絵に表現されていると推測できる。また同じ見開きの右に二人の人物が大きく笑顔で描かれている。この笑顔(沈雨晟 1990: 91)こそ、「タル=仮面」の特徴である。表情を誇張して作ることによって人々の喜怒哀楽が全てこの笑みに含まれ、見る者読む者に親近感を与えるように作られていると考えられる。

以上が『イヤギ』と『日本語版』の絵と言葉の相互作用の比較であった。

#### 4.2 『改訂版』との比較

『改訂版』は、韓国において 2009 年に出版社(ポリム)を変えて、『イヤギ』を再編集出版されたものである。『イヤギ』の新装版でありながら、中身は『日本語版』の影響をより多く受けており、その点を今から分析・考察したい。

前節で述べた通り、『イヤギ』には 2 か所(pp. 16-17, pp. 42-43)の絵のみの両面見開きがあった。『改訂版』ではそれが消え『日本語版』と同じように言葉入りの頁になっている。

pp. 16-17

ST : 천지왕은 고민 끝에 백두거인을 불렀습니다. 백두거인은 천 근 활에 천 근 화살로 해 하나와 달 하나를 쏘아 바다로 떨어뜨렸습니다. 이때부터 흑두거인은 백두거인을 시기하기 시작했습니다. (天地王は悩んだ末、白頭巨人を呼びました。白頭巨人は千斤の弓に千斤の矢で、太陽一つと月一つを射て、海に落としました。この時から、黒頭巨人は白頭巨人をねたみはじめました。)

この両面見開きの直訳を見ると、『日本語版』の方に近似しているのであって、『イヤギ』ではない。言葉が入る位置も『日本語版』(図 3 参照)の両面見開き右上方三行と全く同一である。『イヤギ』を踏襲しているのであれば、言葉なしの両面見開きであるべきであ

た。使用されている語彙にも多少の変化がある。それは『イヤギ』では天を司るハンウル王と地を司るタニム王を区別していたところ、『改訂版』では「天地王」と二つをまとめ一つにしている。さらに『イヤギ』では黒「龍」巨人という言葉を使用していたが、『改訂版』では黒「頭」巨人となっている。これについては、白頭巨人と対照的な名称にするという意図が考えられるが、あえて「龍」を避けた、という点には前述の「満州平野」同様、日本語版に現れた歴史的・政治的な意図の影響も考えられる。

pp. 34-35

ST: “백두거인 만세! 백두장군 만세!”

사람들은 기뻐서 환성을 울렸습니다. “나는 영원히 너희 곁에서 너희를 지킬 것이다. 언젠가 커다란 재앙이 올 때 나는 다시 깨어날 것이다.”

긴 싸움에서 기운이 빠진 백두거인은 조선 백성들에게 말했습니다.

(白頭巨人万歳! 白頭將軍万歳! 人々は喜んで歓声をあげました。『私は永遠にあなたたちの側であなたたちを守る。いつか大きな災厄が来る時、私は再び目覚めるだろう』長い戦いで力尽きた白頭巨人は朝鮮の人々に言いました。)

この両面見開きの言葉を見ると白頭「巨人」万歳と白頭「將軍」万歳となっており、「巨人」と「將軍」が併記されている。『イヤギ』では二回とも白頭「將軍」であった。『日本語版』では二回とも白頭「巨人」であった。『改訂版』はやはり『日本語版』の影響も受けていると思われ、白頭「巨人」が使われているのである。

pp. 38-39

ST: 사람들이 이 산을 백두산이라고 불렀습니다. 조선은 백두산을 중심으로 날로 번성했습니다. 그리고 또 다시 어려운 일이 닥칠 때 백두산이 깊은 잠에서 깨어나 조선 백성들을 도와줄 거라는 이야기가 전해졌습니다. (人々はこの山を白頭山と呼びました。朝鮮は白頭山を中心に日に日に栄えました。それから、再び困難が迫る時、白頭山が深い眠りから目覚め、朝鮮の人々を助けるという言い伝えが伝わりました。)

この両面見開きを見ると、『イヤギ』にあった歌は消え、朝鮮の人々に困難が襲う時、白

頭山が目覚めることは歌ではなく、「言い伝え」として伝わったと書かれており、ここは『改訂版』独自の演出であると思われる。

pp. 42-43

ST : 온 나라 백성들은 일손을 멈추고 하늘에 빚었습니다. 오랜만에 북을 치고 노래를 하니 흥이 났습니다. 어느 새 굶주리고 지친 것도 잊어버렸습니다. (國中の人々は、仕事の手を休め天に祈りました。久しぶりに、太鼓を叩き、歌を歌うと気持ちも高ぶりました。いつの間にか腹が減ったのも、疲れたのも忘れました。)

この両面見開きの直訳を見ると、三つの点において『イヤギ』と異なる。一つは『イヤギ』では、この両面見開きは言葉なしの頁であったが、『日本語版』のように言葉が付加されている。もう一つは下線部に注目すると、『イヤギ』ではこの部分は前の pp. 40-41 に書かれていたものである。それが『改訂版』ではこの頁に書かれている。最後の一つも同じく下線部であるが、『イヤギ』ではお祭りを捧げ始めた、と書かれているが、『改訂版』では天に祈りました、となっているのである。

#### 4.3 考察

以上のように、『改訂版』は『イヤギ』の新装版ではあるが、『イヤギ』にあったような読者にじっくり絵を見せるという趣旨の絵のみの両面見開きはなくなり、却って『日本語版』に倣ったふしがある。「ハンウル王」が「天地王」に、「白頭巨人」が一度は「白頭將軍」に変化した。黒「龍」巨人が黒「頭」巨人に変わったのは、白「頭」巨人と対をなす言葉に変えた可能性もあるが、『日本語版』の歴史的・政治的問題を避けるために、それに倣った可能性も否定はできない。さらに『イヤギ』では、白頭山の歌が伝えられたとしながら、『日本語版』では言葉の順序の逆転はあったが、全て訳出されていた。しかし『改訂版』では「歌」は消え、「言い伝え」として人々に伝わったと記述されるのみであった。『イヤギ』、その翻訳版の『日本語版』、『イヤギ』の新装版の『改訂版』は絵に変化はなく、語彙の使われ方・言葉の配置の仕方、絵と言葉に新しい相互関係が生まれていることがはっきり分かる。『日本語版』の影響を確かに受けた『改訂版』ではあるが、2009年にもなると韓国国内において現代絵本という韓国独自の形が生まれるようになり、定着するようになっていることに鑑みると、現代絵本の誕生として考える『イヤギ』の『改訂版』は単に『日本語版』の影響

を受けたと見るべきではなく、韓国絵本それ自体が変わってきた側面もあると考えるべきであろう。

## 5 おわりに

韓国現代絵本の始まりはいつなのか、何をもって現代絵本とすべきか、明確に定めることはなく、大きな歴史的背景の中で韓国絵本の始まりがあったことを示唆していた。しかし、それはあくまで外的要因の話であったと思われる。外的要因が整った時、内的要因の絵と言葉の相互作用という絵本のイメージ世界が開かれる。前章までの分析・考察から『イヤギ』に内包されたものと確認できた。

韓国現代絵本の誕生から凡そ10年を草創期と考え、それ以降から現在に至るまでの繁栄期については、本稿では何も取り上げなかった。外国へと留学した絵本作家たちが2000年代以降から韓国国内で大活躍することになるとともに、絵本の国際展やコンクールで韓国の絵本が認められることになる新しい道筋が生まれるなど、今までにはない外的要因での繁栄期が始まっている。この繁栄期に関しては語りの分析と共に、外的要因も併せて研究していくことが今後の課題であると思われる。

### 註

- (1) コールデゴッドは藤本がいう「絵」と「文章」が互いに補い合い、助け合っという方法を初めて用いたと多くの絵本研究家が認めている。先行研究でヒョン・キム(2005: 79-80)や、ジョン・パク(2013: 304)も述べている。
- (2) 絵本が開かれ、閉じられるまでの間に絵本のイメージ世界が展開されると考えると、単行本絵本であるという形式は現代絵本の特徴の一つであると考えられる。
- (3) 「白」に関連する山は太白山、妙香山、小白山、漢拏山などがあり、それら白山の中で一番高い山という意味で太白山が白頭山になるのである。
- (4) 朝鮮、古代三国(新羅、高句麗、百濟)についての古記録を収集した書物。13世紀後半の僧、一然の晩年の撰述で原版は残っておらず、中宗(1512)年の再刊本、天理図書館所蔵の今西本(5巻9編)が現存する。「檀君」のように歴史的に重要な記述もある。



- (5) 古朝鮮と中国王朝の満洲地域に対する空間認識のズレが現在まで歴史・政治問題として続いている。
- (6) 3世紀から7世紀にかけて高句麗では数多くの壁画が作られ、現在に至るまで119個であるとされている。
- (7) キョンヒョン(경향)新聞[그림이 들려주는 이야기](7) '백두산 이야기' 류재수 2004.01.09 (絵が教えてくれる物語(7)「白頭山ものがたり」リュウ・チェスウ)ここで作者はもう一つの作品である『ノランウサン(노란 우산)』=きいろい傘はソナタであるというふうに音楽で例えている。
- (8) 読者がページをめくりたくなるしかけ。

#### 参考文献

- 大竹聖美(2016)「海外の絵本と絵本の動向〈韓国〉」『絵本 BOOKEND』朔北社 pp.134-135.
- 崔仁鶴(1976)『韓国昔話の研究』弘文堂
- マリア・ニコラエヴァ&キャロル・スコット(2011)『絵本の力学』川端有子・南隆太訳、玉川大学出版部
- 藤本朝巳(2007)『絵本のしくみを考える』日本エディタースクール出版部
- 박찬수(2018)「한국 출판사장의 일본 그림책 번역출판에 관한 소고」『글로벌문화콘텐츠』(35) 2018. 8. pp.83-102.
- 서대석(1992)「백두산과 민족신화——우리민족과 만주민족의 신화를 중심으로——」『白頭山説話研究』高麗大学校民族文化研究所 pp.29-58.
- 沈雨晟(1999)「한국의 탈(仮面)에환(哀歎)을 미소로써 감싼 조형성(造形性)」아시아민족조형문화연구소 한국학회 제2회 아시아 장인문화 전문가 국제회의, 10, pp.87-91.
- 여효규(2017)「고구려와 중국왕조의 만주지역에 대한 공간인식」『한국고대사연구』(88), 2017. 12. 165-208.
- 이옥(2000)「조선전기 국가 기우제와 산천」『Journal of Korean Culture』1: 171-181.
- 전호태(2011)「산 자의 소망, 죽은 자의 꿈 고구려 구분벽화」『기록인』winter vol. 17, pp.40-57.
- 정진현, 박혜숙(2013)「한국의 그림책 인식과 형성과정」『동화와 번역』2013 제 26 집, pp.291-310.
- 조은숙(2006)「한국의 그림책 발전」『어린이 문학교육 연구』제 7 권 제 2 호, pp.113-151.
- 채래옥(1992)「백두산전설의연구」『白頭山説話研究』高麗大学校民族文化研究所, pp.59-82.
- 현은자, 김세희(2005)『그림책의 이해 1』사계절

경향신문[그림이 들려주는 이야기](7) '백두산 이야기' 류제수 2004. 01. 09.

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies(AKS-2016-OLU-2250001)

(ゆん へじょん／博士後期課程)